九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

遠藤周作論 : 「救い」の様相

池田, 静香

https://hdl.handle.net/2324/7182259

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（学術）, 論文博士
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

（様式６－２）

氏　　名	池田　静香
論　文　名	遠藤周作論―「救い」の様相
論文調査委員	主　査　九州大学　教授　松本　常彦 副　査　九州大学　准教授　倉方　健作 副　査　九州大学　講師　松枝　佳奈 副　査　横浜女子短期大学　元教授　兼子　盾夫 副　査　長崎県立大学シーボルト校　教授　下野　孝文

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

申請論文は、遠藤文学の研究史の上でも主要な問題である神の「救い」の問題について、従来の基本的アプローチであったキリスト教との関係に加え、第二次世界大戦との関係から再検討し、両者の関係性の交差として新たな様相を提示する試みである。

序章は、現在の遠藤研究の課題として遠藤自身の自作解説や発言の相対化があり、研究史を確認しつつ、本論文も相対化の試みの一環であることを確認する。

第一章は、申請者が発掘した未発表草稿「われら此処より遠きものへ」（一九五三年頃執筆）の検討から始まる。遠藤のフランス留学時（一九五〇～一九五三）の研究対象でもあったマルキ・ド・サドの性格が、後年の「サド伝」（一九五九）や「爾も、また」（一九六四～一九六五）とは異なる点に注目し、草稿の「救い」の問題と第二次世界大戦との関係を指摘する。戦争と「救い」の問題は、『女の一生二部』（一九八二）を通じても検討され、戦争下の絶望的な悪とそれに抗する「救い」への志向の葛藤が、アウシュヴィツ収容所副所長の共苦の思いや原爆投下のボタンを押すアメリカ軍人を通して表現されていると指摘する。同作の戦争と「救い」の問題が、ヨハネ・パウロ二世の広島・長崎訪問と「戦争は人間のしわざ」という宣言に関係することも指摘する。

第二章は、サドおよび第二次世界大戦下の悪と「救い」を背景に、桜島の噴火に取材した長編『火山』（一九五九）の検討から始まる。同作の「赤岳」は桜島をモデルとするが、本論文は、「気象」誌や「天気」誌や「測候時報」誌また『日本災異志』などをはじめ、桜島の活動記録や報告等の資料と対比検討し、「赤岳」の記述の性格を桜島関係資料との関係から読解する。桜島が「赤岳」と化す理由を「人間の心の中にも悪の火山」があるという遠藤発言に求め、火山の象徴性を検討する。その検討を通じて「赤岳」が、第一章で検討したサドの自然観と関係することを指摘している。戦争の悪と「救い」の様相は、戦時下の米軍捕虜の生体解剖実験に取材した「海と毒薬」（一九五七）でも考察される。日本の精神風土とキリスト教の対立という点から解釈されがちな同作について、モーリャック「テレーズ・デスケルー」や堀辰雄「菜穂子」との対比検討を通じ、「海と毒薬」の人物像の分析を行うことで、対立のみではなく、その接合への志向性が潜むことを指摘する。戦争と「救い」の問題は、教科書掲載作品「幼なじみたち」（一九七七）を通じても検討される。戦時下の日本で拷問を受け、戦後に自分を拷問した日本人がいる場所で生きることを選択した神父の内面を描かない点に注目し、その心情は、作中の伊東静雄の詩に託されていると指摘する。具体的には、神父が選んだ戦後の生き方そのものの尊厳と宗教性にメッセージがあるとする。同じく教科書掲載作「白い風船」（一九六九）でも、不可視の内面を有する他者に注目し、「母なる神」を人間的次元

でのみ捉えるのは、理解できない相手に対する尊重が損なわれる危険があると指摘する。

第三章は、「沈黙」（一九六六）を第二次世界大戦体験と関係づけて読解する。「沈黙」執筆の動因に戦時中の弱者としての経験と踏絵の二つの要素があるとし、その二つの要素を内包する「満潮の時刻」（一九六五）と対比検討する。戦死を解消しきれない「母なる神」の「救い」の限界、キリスト教界の批判を浴びた「母なる神」から「かくれ切支丹信仰」に傾斜するプロセス、「母なる神」の変容と「日本の沼の中で」（一九七九）との関係などを描き出している。

第四章は、カトリック新聞および長崎新聞の紙面調査から遠藤文学の受容の様相を分析する。「沈黙」の禁書化に代表される遠藤に対するキリスト教側からの反発は、遠藤自身も反復的に語っているが、新聞調査では必ずしも反発一辺倒ではなく、遠藤作品の受容は多面的であること、一九七〇年代以降は、第二ヴァティカン公会議の広報に関する教令の影響で、むしろ布教利用の様相すらあることを指摘している。その受容が、時期や場所と相関関係を持つことを示す多くの具体的事例は、読者が受容する「救い」の様相の多面性を描き出している。

上記のように、本論文は、遠藤文学における「救い」の問題が、戦争の問題と交差しつつ多様性を有し変容することを提示している。また、本論文が発掘整理した未発表草稿や新聞資料は、今後の遠藤研究の領域で基礎資料になると認められる。

以上により、委員全員一致で遠藤文学の研究に寄与する博士（学術）の学位に値する論文であると判断した。